

武蔵野日曜集会

開眼

——ヨハネ伝第9章——

1968年1月14日

小池辰雄

罪の問題 神の業の顕れん為 我ら「神と我」 キリストという光 キリストの唾 目をあけし日は安息日 ただ一つの事を知る 神は御意をおこなう人に聴き給う 律法が福音か アウトサイダー 我信ず主よ！ 極限状況者 無者は同時に無限無量者とされる パウロの開眼 キリストの眼をもつて見る

【ヨハネ9】

1 イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給いたれば、2 弟子たち問いて言う『ラビ、この人の盲目にて生まれしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』3 イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。4 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。5 われ世における間は世の光なり』6 かく言いて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い給う、7 『ゆきてシロアム（称けば遣されたる者）の池にて洗え』8 乃ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。9 ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』10 或人は『夫なり』11 正しい、或人は『否、ただ似たるなり』12 という。かの者『われは夫なり』13 と言いたれば、14 人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』15 答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往きて洗え」と、乃ち往きて洗いたれば、物見ることが得たり』16 彼ら『その人は何処に居るか』17 と言え『知らず』と答う。

18 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。19 イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。20 パリサイ人らも亦いかにして物見ることが得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗いて見ゆることを得たり』21 パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』22 と言ひ、或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』23 と言ひて互に相争いたり。24 爰にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』25 彼いう『預言者なり』26 ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしこと



● 罪の問題

ヨハネ伝第9章、これは大変なところであります。

「イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給いたれば、²弟子たち問いて言う『ラビ、この人の盲目にて生まれしは、誰の罪によるぞ、己のか、親

を未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親を呼び、¹⁹問いて言う『これは盲目にて生まれしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』²⁰両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生まれたる事とを知る。²¹されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、年長けたれば自ら己がことを語らん』²²両親のかく言いはし、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。²³両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。²⁴かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』²⁵答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』²⁶彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』²⁷答う『われ既に汝らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその弟子とならんことを望むか』²⁸かれら罵りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。²⁹モーセに神の語り給ひしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』³⁰答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。³¹神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。³²世の太初より、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。³³かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん』³⁴かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生まれながら、我らを教うるか』³⁵と云いて、遂に彼を追ひ出せり。

³⁵イエスその追ひ出されしことを聞き、彼に逢いて言ひ給う『なんじ人の子を信ずるか』³⁶答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』³⁷イエス言ひ給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』³⁸爰に、かれ『主よ、我は信ず』³⁹と云いて拝せり。⁴⁰イエス言ひ給う『われ審判の為此の世に来れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』⁴¹パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目なるか』⁴²イエス言ひ給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言う汝らの罪は遺れり』



のか」³ イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に
神の業の顕れん為なり。⁴ 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可
らず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わ^あず。⁵ われ世における間は世の光
なり』

「生まれながらの盲人」という。この世における、考えられる不幸のうちの最大なもの
のひとつ――あるいはある意味においては最大と言ってもいい――それは目が見えないこと
であると思います。ヘレン・ケラーは、目が見えず口がきけず耳が聞こえずという惨憺た
る人であります。全く八方塞がりですね、ヘレン・ケラーも。しかし、どんなに塞がつて
いても、心、魂、これを塞ぐ物理的なものはない。もし、物理的にこれが塞がれたら、そ
れはもはや人間でなくなる。そういう生まれながらの盲人というのは、考えられる最も不
幸なる状態で、極限状況であります。

イエスの言、イエスの業^{わざ}というものはみな、極限状況に対する言であり、極限状況に対
する業である。福音というものは、この極限を展開するものでなければ、救いではないん
です。人間にはその極限を展開することができない。それが芸術であろうと、学問であろ
うと、道徳であろうと、政治であろうと、経済であろうと、いかなる人間の営みにも、人
間の持つているところの極限を展開することができない。

福音とは即ち、極限状況者を救うということです。弟子たちは、しかし私たちも、盲人
を見て、そこまで深刻に果して考えているか。大体、考えていないわけです。ただ、「まあ
お気の毒だ」くらいのところで。人間というのはそれくらい利己的なものです。

そこでこの弟子たちは――キリストの弟子ですよ、これは。パリサイではなかった――

「先生、この人が盲目で生まれたのは、誰の罪によるのでしょうか。自分の罪
なのでしょう、か、親の罪でしょうか」

と、もうこの問いが落第であります。まあ、禅宗の坊さんだったら、大喝したかもしれない。
人を審いている。この盲人の罪か、また親の罪かと。

これが旧約における罪觀念の非常に頑^{かた}な一面なんです。また、それはある意味にお
いて聖書の宗教の素晴らしきでもあるのですけれども。それがひとたび取り方を間違える
と、パリサイとなる。ユダヤ人が罪の問題に非常に深刻にとつくんだということが非常に
大事なことであると同時に、また、罪の問題を他人事として、そこに優劣を考えて、知ら
ないまに自分が義人になってしまふという面がある。この伝統的な罪の問題に対して深刻
な悩みをなして問題を投じたのが旧約のヨブ記です。

この時に弟子たちがパリサイ的角度に知らないまになって、

「あの盲人の罪のためでしょうか、親の罪のためでしょうか？」

と。それはそういう場合もあるでしょう。問いがまんざら客観的に間違いでもないでしょう。



●神の業の顕れん為

3 イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。』

この生まれつきの盲人にでつくわして、直ちにこのようなことを言われるイエスというひとは、何というひとだろうかと、まずそのことに驚かなくてはいかん。その盲人の本質を見、その盲人において神がその盲人をどうしようとなさっているかということを見てい

るのではない——イエス自身が全く神の心を持つていなければ、これは出てこない。キリストは神を対象として見てない。神を内観している。神を内において観る。また、神の眼をもつて、それゆえに見る。こういうひとであります。そういう現実がキリストの信仰の現実である。

「神の業」の顕れん為なり

ということとは、決して想像で言えるような言葉ではない。はつきり、

「神の業がこの私を通して顕れるためである」

と。本当にキリストが神の中になれば、この言葉は出てこない。

よく私たちも、「神の御意」^{みこころ}なんてことを言う。「御意」ということを、なにか外側から言うて待っていて、

「どういような御意が、ご宣托がくるだろうか」

なんてなわけです。そういうことをいつまでやっていても、御意は聞こえてこない。神の胸の中に、キリストの胸の中に、キリストの腹の中に自分を投げ込んでこそ、御意が聞こえてくる。この投げ込みのないところに、「御意の、祈りの」なんて言ったって、それはダメですよ。

●我ら「神と我」

4 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。

おもしろい言葉です。ここでキリストが「我ら」と言った、「神と我」というものをはつきり、神を意識している。ここで「我ら、私たち」という。

「神さまと私は一つになっている」

のだから。

「われこれなす」

と言いましても、キリストの「われ」は絶対に手放しのわれではない。

私たちの信仰が——あのペテロもそうでした。パウロもヨハネもそうです——

「われを視よ」

と言う時のこの「われ」が全く、

「キリストと一つ」



でなければ、この「われを視よ」とは言えない。でなければ偽りである。とんでもない傲慢である。そういう「われ」、そういう「われら」。それに来るまでは、「信仰」なんていくら言ったって、それはダメです。

私は無教会の攻撃をするのではない。私は無教会というところに自分の歴史を持っているから、皆さんに言うわけです。私の無教会時代には、それは信仰の中味は、意味はみな間違っていたとは思いません。結構でした。心も非常に満たされました。内村先生の集会、藤井先生の集会、塚本先生の集会に私は、この三代に仕えましたが、どの一回といえども、

「今日はどうもつまらなかった、今日は無駄であった」

とか思った日はありません。さすがにこの三人の先生はみな素晴らしい先生です。でありますが、私自身がまだ幼かったからでしょう、この信の世界がまだ、今申し上げたような一如の信、キリストと本当に一つの信ということがどうしても本ものになっていない。ズレがある。何か自分というものがまだ残っている。

「それでは、自分が残らない境地に入るのは大変だな」

と皆さんは思うかもしれないけれども、ちつとも大変でない。自分が残っていた方がいいですよ。また私は逆説的なことを言うけれども。自分が残っていたと思ったところが、残らざる自分のはつきりと――二重人格みたいだけれども――残らざる自分というものがはつきりと受けとれる世界がある。

「ああ生まれつきの自分なんていうやつは気の毒なやつだな。まだ残っていやがるな。しかし、この残らざる事態をいかにせん」

と、もうひとつ内側から言うことのできる、その世界がある。それが本当の信です。そうでなくて、

「本当に自分が残らざる世界に現実になければならない」

ともし言うならば、私はもう今日でもキリスト教をやめなくてはならないかもしれない。それが本当にできたのは実はキリスト一人なんだから。イエスの他に、その残らざる自分なんてものがないやつはありはしないんです。だから、

「義人なし一人だになし」

と、パウロが言ったんです。

「ああ、われ悩める人なるかな」

と、パウロは救われても、そう言った。

「けれども、感謝する」

と言って、パウロは引っくり返しているでしょ。悩める人を引っくり返してしまった。時間的の前後じゃないですよ。質的な構造になっている、パウロのあの告白は。

「悩める人でありながら、私はちつとも悩んでいないんだぞ。感謝すべきかな」

と言って、もの凄いものがこの悩める人を蹴つ飛ばして、見下して、そっちのけにしてい



るというのが、我々の信の現実なんです。

そこを受けとらないで、悩める人を見て、

「小池先生は悩んでいるから、あれはいい加減にして他の集会に行こう」

なんて、いくらでも行つてくださいよ。私はそんな旧来の悩める我なんてものは問題にしています。しかし、

「自分が問題にしていけないものを問題にされるから困った話だな」

ということ。皆さん一人ひとりが胸に手を当てて、

「本当にキリストと今日も明日も次の日も一つである」

と言える人がいますか。

しかしながら、人にどう言われようと、自分が自分自身にどう言おうと、「それにもかかわらず」というものの凄い信の、キリストと一つの現実がある。これが本当の救いの確かさであり、これが本当の力。私が原始力と言う、原始核というものです。今は原子力時代だが、この御霊という原始核を持ったら、これはもはや何ものをもつても代えることができない。イエス・キリストは御霊そのものの、原始核そのものに大胆になってしまっている。

それでも、彼は決して魔法使いでも何でもない。普通の人ですから。いつもぶつつぶれて、「主よ、あなたの御意です」

と。彼は人間であります。弱さをしょっている。パウロが言っているとおり。人間の弱さを極みまで知っている、しょっている。だからこの、

「御意をなされたまえ」

と。どんなに自分が素晴らしくても、その素晴らしさを絶対に私しません。ここにこのイエスのイエスたるところがある。

少し物理の方面の本を見たら、原子の一番中心に原子核というのがある。これはもの凄く小さい。現実にはもう無に等しい。何千何百万兆分の一メートルとか何とか、そういう無に等しいような核が核分裂をするのだから、まず恐ろしいはなしです。私におけるこの聖霊は、

「芥子種一粒」
からしだね

とキリストが言われたこの信、この信がうちに来たらば。何かそれを——私は仕方がないから、こんな説明の仕方をするけれども——何か対象的に顕微鏡的に考えてはいけませんよ。

●キリストという光

4 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。
つかわ わた あた

我を遣し給いし者の業を我らは——父と私は——昼の間にしないではいられない。「せざ



る可からず」という非常に強い言い方です。「デイ」というギリシア語が使っている。しないでいられないんだよと。夜がきたらば、誰も働くことができない。キリストの言葉は非常に普通の事態でものを言っておられる。

5 われ世における間は世の光なり』

私はこの世の中に――闇の世に――いる間は、世の光であると。私たちもこのダメな我々でありながら、世の光である。何となれば、

「御霊のキリストわがうちにありたもうがゆえに」

と、これが言えるんです。自分という闇がどんな闇であろうと、この光は闇に勝つ。この驚くべき光を、どんな暴風も消すことのできない光を持っていますから、

「我は光なり」

と言える。それをです、頭で命題的に納得したって、それはちつとも光ではありませんよ。

「私は、もうこの光は素晴らしくて、うれしくて居ても立ってもいられないんです」

と、そういうように本当に告白できる人は、この御霊のキリストという光を持っている。

「だけど、お前はダメじゃないか」

「はい、ダメでございます。けれども、私はダメでないのです」

と、言えなくてはいかん。信仰の世界は神的な権威を持っています。

「まだ私の信仰は……」

なんて妙な謙遜をしている世界ではない。それで、楽しいと言える。

●キリストの唾

6 かく言いて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い給う、

まずキリストは面白いことをなさる。それは科学的に何のことだか分かりますよ、そんなものは。いわゆるおまじないみたいな。

普通の世界でも、唾液というのは非常に殺菌力を持っている。ことに小さい赤ん坊やなにかのはね。いわんやキリストの霊体において神の霊が横溢しているところのキリストの唾には不思議な霊的な能力があるに相違ない。それで、これを塗った。具体的にキリストの霊の現実をこの泥の中に唾を混ぜた事態をもつて、この生まれつきの盲人の目に接触させた。

「つらつら手にて触れ」(ヨハネ一1:1)

というが、つらつら唾にて触れたところの事態。キリストの神の霊、神の愛が、神の霊的な力が、つらつらこの唾を通して生まれつきの盲人の目に触れた。泥が混じっているから泥は洗える。泥は洗っていいが、私の唾はもはや水では洗えないんだぞと。私の唾は塗ったと同時に浸透している。塗ったと同時に――唾液が浸透しているのではない――唾液にあるところの、宿つているところの霊が浸透した。これが物理的世界よりも霊的世界の素



晴らしさです。そのような非常手段とも思われるようなことで、この生まれつきの盲人の目を開けるのだから、それはいい加減なことではない。

7 『ゆきてシロアム（称けば遣されたる者）の池にて洗え』

と。「ベテスダの池」というのがありましたが、今度は「シロアムの池」という。

乃ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。

実に簡素に書いてある。もの凄い現実を何でもないように書いているんだね、この福音書というのは。我々だったら、たくさん形容詞を使って描写するところでしょうけれども。偉大な文学というのは素朴なんです。絵でも偉大な絵は素朴な絵である。雪舟あたりが達磨を一筆でさつと描いてしまう。ああいうところに分裂のない一如の靈筆が動くわけです。

8 ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』

何も働けないから仕方ない。乞食をしている。

あの跛者も乞食で、うるわしの門の所で坐っていたが、ペテロが何してくれるかと思ったところが、ペテロは、

「私はお金は持っていない。しかし、私の中にあるものをお前に与える。キリストの名によって歩め」

と。それで生まれつきの跛者が立つてしまった。この跛者がもう喜び勇んだと書いてある。使徒行伝に。あのペテロ、ヨハネは完全にキリストをうちに宿していました。ペテロ、ヨハネは相変わらずの罪びとです。躓いたり転んだりすることもありうる人間です。けれども、キリストを宿しているこの現実をいかんせんというわけであります。パウロも、「土の器に」と言った。

「土の器にこの宝がある。この宝の持っているところの力が現れるためである」
と、パウロも言った。

●目をあけし日は安息日

彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』
乞食をやっていたのではないかと。

9 或人は『夫なり』といい、或人は『否、ただ似たるなり』という。かの者『われは夫なり』と言いたれば、

キリストの、

「我はそれなり」

と同じ言い方です。「エゴ エイミ」という。英語で「アイ アム」、ドイツ語で「イッヒ ビン エス」という。「私はそれだ」と。日本語でいうと「私だよ、私ですよ」と。この「私ですよ」というのとギリシア語の言い方が全然同じです。「私は在る」という存在を言っ



いるのではない。

「それは私だよ、私ですよ」

と言っている。

10 人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』

「どうしてお前の目は開いてしまったのか。お前は盲人のはずではないか」と。

11 答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往き

て洗え」と、乃ち往きて洗いたれば、物見ることが得たり』

あるがままの事実をそこに述べた。

12 彼ら『その人は何処に居るか』と言えば『知らず』と答う。

「そのイエスという人はどこにいるか。知りません、どこかへ言ってしまった」

と。いともあつさりしている。この盲人もあまりの違いに少し呆然としてしまっているのかもしれない。何が何やら、生まれつきの盲人だからわけが分からない。

13 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。

なかなか詳しく書いてある。

14 イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。

あいかわらず、このパリサイというやつは、

「安息日にどうしたこうした」

と言つて、問題にするご連中です。

15 パリサイ人らも亦いかにして物見ることが得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗いて見ゆることを得たり』

と、同じことを淡々と答えた。

16 パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし

者にあらず』と言い、

「これはなにか悪魔にでもそそのかされてやったんだ。これは神から出た人ではない」と。

或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』と言いて互に相争いたり。

「もし罪ある者であるならば、律法をちゃんと守らないような人間であるならば、

どうしてあんな徴ができるか」

と言つて反論したわけです。互いに争った。

●ただ一つの事を知る

17 爰にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就き

て如何にいうか』

「目をあけたあの人をお前はと思うか」と。そしたら、サマリヤの女と同じように、

彼いう『預言者なり』



「預言者でなければそんなことはできないと思います。預言者なんでしょう」と。彼は預言者だと。

18 ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしことを未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親を呼び、

「そんなことがあるか」と言つて、受けとらないわけですね。目の開いた人の両親を呼んで、
19 問いて言う『これは盲目にて生まれしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』²⁰ 両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生まれたる事とを知る。²¹されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、年長けたれば自ら己がことを語らん』²² 両親のかく言いしは、ユダヤ人を懼れたるなり。

これを「預言者」と言つてみたり、うつかり「メシヤ」なんて言おうものなら、とんでもないことになるからと。

ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。²³ 両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。

そういうことを心配して、にっこしてしまった。

²⁴ かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人イエスのことですよ。

かの人の罪人たるを知る』

「あれは罪びとだよ」と。「神に栄光を帰せよ」というのは、メシヤなんて言ったら、これは神に栄光を帰せないことになるから。ユダヤ人はそう思っているんですよ。

²⁵ 答う『かれ罪人なるか、我は知らず、

律法を守らないような者を「罪びと」というんですよ。安息日にすべからざることをしたというので、それを罪びとと言った。

「律法を破ったやつ、罪びとであるかどうかは私は知りませんが、あなた方が仰るような人か知りませんが、

ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』

この事実だけは、あなた方が何と言おうと、これは否定するわけにはいきません。私は今まで見えなかったのが見えるようになった。あの人がどうだこうだということとは分かりません。私は、預言者だと思うということは言いましたけれども「と。まあ、預言者くらいなら許してやるけれども、メシヤなんて言ったら大変なことになるので。」



●神は御意をおこなう人に聴き給う

²⁶彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』²⁷答う『われ既に汝らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその弟子とならんことを望むか』

今度は逆にやつつけた。

「それでは、あなた方も弟子になりたいわけで、そんなに一生懸命であなた方もお聞きになるんですかね」と。

²⁸かれら罵りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり』。

「生意気なことを言うな」というわけで。

「お前はそのイエスというやつの弟子だ。俺たちはモーセの弟子だ。モーセなんてものはイエスとはおよそケタが違うんだ」

と言って、モーセを非常にかついでいるわけです。

²⁹モーセに神の語り給いしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』

「モーセには神さまが啓示なさつて、いろいろなことを、ことに十誠を与えた。それは私たちは知っているけれども、この人が一体どこから来たかと。とんでもないインチキ野郎だ、やました」

くらいのことですよね。

³⁰答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、

「それは少しあなた方をいぶかしがるよ」と。

彼わが目をあけしに。³¹神は罪人に聴き給わねど、敬虔けいけんにして御意をおこな

う人に聴き給うことを我らは知る。

この盲人乞食もなかなかちゃんと答えている。

「あなた方が言うような罪びとには神さまは聴きたまわれないけれども、敬虔にして

御意をおこなう人で、

律法にこだわっているようなことではない。信仰があつて、御意を行なう人、神の御意を受けてそれを実行する人、

神の御意を力と共に受けなければ、実行できませんよ」

と。まあそこまで考えたかどうかは知りませんが、これははっきりしている。

「御意が分かったから、ひとつこれで実行しよう」

なんて、それはできませんよ、そんなことをやったら。

御意と同時に力がくる。神の力を受けとれば、また御意がそこに分かつてくる。神の言と霊とが――霊は力を持っています――これは一つです。「意」と書くのが、「言」と書くのが、あるいは「行」と書くのが、みんな同じことです。全部、一貫しておりますから。

³¹神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを



我らは知る。

大いに自分の信仰で力んでね、行なう人もありますよ。だけれども、そんな行いは本当の行いではない。これはルターさんがさんそのことを言っている。

³²世の太初^{はじめ}より、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。

未だかつて開闢^{かいびやく}以来、盲目の目をあけたものを聞いたことがないと。それは預言者の中に書いてある。なるほど預言はある。

●律法が福音か

イザヤ書35章にちゃんと書いてある。有名なイザヤ書35章です。5節に、

「⁵そのとき聾者^{めしい}の目はひらけ聾者^{みみしい}の耳はあくことを得べし。⁶そのとき跛者^{あしなえ}は鹿の如くにとびはしり、唾者^{おし}の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。」(イザヤ35・5〜6)

という。そういうその時が来るとイザヤが預言している。まあしかし、預言者たちも大したもんですよ。

「そういう現実が今に来るぞ」

と言って、示されているんですからね。未来を現実にして、希望を現在にして、現実にして受けとつて、ものを言っているのがこの預言の世界です。だから、

「汝らは預言者を、聖書をいろいろ調べているが、聖書は我について証をしているのだ。我について預言をしているのだ」

と。旧約のこのような事態を、またイザヤ書53章のような、罪なき者が罪ある者の罪を完全に贖うような事態。

「聾者の目がひらき、聾者の耳が聞こえ、跛者が立ち、癩病人が癒され、死人が甦る」

というような、こういった事態を全部、キリストは成就した。

キリスト自身が徴^{しるし}の徴である。徴中の徴。「セイメイオン」中のセイメイオン。ところが、人々に、パリサイ人に「言い逆らいを受ける」ところの徴であった。しかしながら、

「神は敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る」

と言って、断然ここに言い放った。

³²世の太初^{はじめ}より、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。

³³かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん」

「あの人があもし神から出て来なかったならば、何事をもなすことができない」

と。盲人もこの時は何か上からの示しに従って言えた言葉であつて、今までの盲人ではこれだけのことは言えなかったでしょう。預言者は神より出たものである。神から出た人。



33節は極めて大事な節であります。

あの人がもし、「神から」「パラ テウ」出たのでなければ、彼は何事をもすることができなかった。「できなかったにちがいない」という言い方ですね。ところが、神から出てくる人だから、いまだかつて人のなしえなかった事ができたという、逆になる。そうすると、

「お前さんたちが大いにかついでいるところのモーセよりももうひとつ次元が上だぞ」

というわけです。

「律法か福音か、モーセかキリストか」

というわけです。まあ今でもユダヤ人は相変わらずモーセなんだよな。全くこれは不思議ですよね。これだけ驚くべき福音書というものを、ユダヤ人はやはり目をつぶっているのかね。これは預言者の一人くらいにしか思っていないんだ。

34 かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生まれながら、我らを教うるか』と

言いて、

ときた。

「お前は盲人で、それは何かの罪のわけなんだ」

と。パリサイ人だからね、こっちは。弟子たちはキリストから、そうじゃないと聞かされていますけども。パリサイ人なんて、聞かされたって、それを受けとりはしませんよ。何かこれはその原因がある。因果応報なんだと。報復観念というやつがユダヤ人にこびりついてるからね。因果律、道徳的因果律です。

「生意気なことを言って私たちを教えるか。なかなか小癪こしゃくなことを言うな」

と。実はちよつとこの言葉に彼らは驚いたわけだ。

我らを教うるか』と言いて、遂に彼を追い出せり。35 イエスその追い出され

しことを聞き、

せつかく目が見えてしまつて、証しているに――これは証人あかしびとですよ、ちゃんと証をしているんだ――この証人を追い出した。アウトサイダーにしたんだよな。

●アウトサイダー

私はこの35節を読んで、非常にありがたかった。私も、御霊の事態になったら、無教会から外に投げ出されたわけだ。アウトサイダーに。面白いことを言っているなと思つて読んだ。そうしたら、キリストはそれを見出した。見出すためには、捜さなければ見出さない。キリストは私を尋ねてくださつて、

「お前、ここにいたか」

と見出してくださつた。キリストに見出されて、もう他の何ものにも見出されなくなつたつていいですよ。無教会はその点でお気の毒さまで、大事な私を外へ出してしまつたからね。



ナチス・ヒトラーなんてやつも、大事な学者をアウトサイダーにして出してしまった。そうすると、ノルウェーに逃げたり、アメリカに逃げたりした。そういうったもの凄いの物理学の学者が今度は逆にヒトラーに報いてしまったようなことになってしまった。あれはユダヤ人迫害しないで抱えてごらんさない。もの凄くドイツは世界を制覇してしまつたでしょう。まあ、ヒトラーによって世界が制覇されなくてよかったです。

³⁵ イエスその追い出されしことを聞き、

「ああ、どこかに除け者にされてしまった。どこへ行ってしまったらうかね、目をあけてやったあの男は」

と言って、探して、それを見出したんですね。そして、「彼に逢いて」と書いてあるけれども、「彼を見つけて」

ということですよ。口語訳では、「彼に会つて」と書いてある。「彼を見つけて」と訳した方がいい。偶然に会つたのではない。見出した。探してください。探してくださったんだ、イエスは。

「どこへ行つたかなあ。アウトサイダーにされたその男は」

と言つてね。イエス自身がアウトサイダーのアウトサイダーたる人でありました。ユダヤ人からはね出された人です。

正統派から異端視されたひと。神の国の本当のどん底の真理をになつてゐるひとたちは、ほとんどみなその時代にアウトサイダーにされたような人たちです。それはいわゆる異端者もいますよ。けれども、本当のどん底を担った者もまたこれアウトサイダーにされる。パウロも「異端の首^{かしら}」と言われた。光栄なるかなこの異端というわけだ。痛みいることはない。

皆さんは、そのアウトサイダーです。

「どうも、武蔵野幕屋なんてのは小さなもので、あれは頼りになるかな」

なんて思つて、もしここにいらつしやるなら、どうぞ、頼りになる所へいらつしやつてください。

私は何ものをも頼りとしない。キリストだけを頼りにします。キリストに見いだされた人間であります。キリストに見いだされたあなた方一人ひとりである。この自覚にきましたら、千万人といえども我往かんと。一切を包摂する、一切を担いあげるような原始力^{はつりりき}を、ウルクラフトを、この原始核^{はつしき}をうちに宿して、

「我は原始核者なり」

と。これ以上うれしいことはありませんか。私はもう他の何ものをもつてしても代えることができない。何をもつて私を釣ろうとしたつて、このイエス・キリストの御霊という原始核と取り替えるものは世界中にひとつありません。

旧き人間小池を問題にして、ここから出て行つた人たちはお気の毒さまというわけだ。私は躓きの石だよ、その意味においても。けれども、なにも自分の旧き我なんていうもの



をひとつもいいなんて思ってやしません。どしどしそれは乗り越えてまいります。そして、三日月から五日月の、六日月のとだんだんなつてまいります。

●我信ず主よ！

イエスは、

彼に逢^あいて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』

「なんじ、人の子を信ずるかね」と。「人の子」なんて言われたつて、わからないわけだ。「人の子」「ベン アダム」という。ギリシア語では「トン ヒュイオン トゥー アントロ―プー」という。これは暗号なんだ、「メシヤ」のこと。ダニエル書に書いてある。メシヤなんて言うのと、とんでもないことになるから、まだその時でないから、キリストも「人の子」という隠語で言っていらいっしやるわけです、隠された言葉で。

「人の子を信ずるかね。メシヤを信ずるかね」と。

³⁶答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』

まだ、これは預言者くらいにしか思っていないんだからね。預言者と「人の子」はケタがちがう。「人の子」を預言しているのが預言者なんだから。

³⁷イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』

「人の子は誰ですかと言うが、お前はその人を見た。お前と語っているその者がそれなんだよ」

と。これはちょうどあのサマリヤの女と語っていらいっしやる問答とよく似ています。「お前と語っているところの者がそれなんだ」と。即ち、もうひとつ言えば、「私だよ」ということ。

³⁸爰^{こゝ}に、かれ『主よ、我は信ず』

非常に明瞭な言葉です。

「我信ず、主よ」（ピステウオー キュリエ）

という順序になっています。人間の会話というものは大体、順序が頭で整えた言葉の配置と逆になる。「先生、信じますよ」とは言わないで、「信じますよ、先生」というような言い方をする。それと同じ言い方です。「主よ、我は信ず」でなくて。ダメだよ、この訳は。この文語は引っくり返さなくては。

「我信ず、主よ！」

と。もう少しドラマチックにちゃんと印刷してもらわないと困るよ。「主よ、我信ず」なんて、そんな整ったような言い方をするからいかん。生命の現実を整ってなんかいやしませんよ。

というて拝せり。

と今度は、拝んでしまった。拝んだということは、別な言葉でいうと、平伏^{ひれふ}したということです。これはギリシア語でいうと、「拝跪^{はいくわい}する、跪^{ひざまず}く」という字です。

この38節は信仰の態度を表していかんき節であります。これも今度の新聞に書いてやつ



た。

「福音書にきて、イエスの言葉や行いが分かるの分からないのと、そんなことを研究している聖書研究会なんてものでは絶対に入れないよ」

と。もうそういう書き方をしなければ、みんな分からんからね。分かるの分からないの、どうのこうのと、そんなことではないと。

「この福音書に現じているところのキリスト、神の現象体であるキリストに文句なしに降参し拝跪し平伏すのでなければ、このドラマは幕が開かないよ」

と。開いたような顔して見ているけれども、実はちつとも開いてやしない。読んでいるような顔しているけれども、ちつとも読んではしない。それは古典の文書として研究し解剖しているばかり。解剖すればするほど、微に入り細を穿^{うが}つて研究すればするほど、分析すればするほど、生命は抜けてしまう。何しろ勿体ぶつたようなのがたくさんあって困るよ。

●極限状況者

これがもうキリストの前に、

「はい、受けとります。主よー!」

と言うと同時に彼はぶつ倒れた、その前に。全く平伏してしまった。あなたは預言者ではなかった。私が思ったような預言者ではなかったと。次元のちがった、質のちがった方でありました。キリストは、聖人でも君子でも、学者でも英雄でも、一切の範疇に入らない。人間の文化的世界のいろんな範疇がありますが、どれにも入らない、イエスというのは、無者だから。何でも無いひとだから。無者だ。

皆さんは、何になってもいいですよ。博士でもバカセでも何にでもなってください。けれども、自分を何か肩書で意識しているようなことであつたら、これはダメです。天国の門を入ろうと思つて、その肩書を見せたつて、

「どっこい、待て。天国は肩書では入れないところだ」

と。この無者であります。キリストと同じように無者修行をしたかねと。

「無者であることを修行してきたか」

と問われる。この無者修行をしてきた者は入れる。

「何とか修養会」「キリスト教修養会」「キリスト教ゼミナール」なんてやっているけれども。「キリスト道無者修行」という。そういうのを今度書こうかな(笑)。そんなことは書かないけれども、まさにキリスト道無者修行ということですよ。

「そうだ、お前たちは本当のアウトサイダーだ。しかし、この本当のアウトサイダーを天国のインサイダーにしてやる。天国のうちにに入れてやるぞ」

と。しかし、あらかじめ招かれた者たちはみんな断つた。



「^{まがき}籬の外からみんな盲人でも跛者でもいいから引っ張って来い」

と、キリストは天国の饗宴に、そういう譬えを言われました。まず激しい言葉です。

けれども、それはこの極限現実を、実は我々は自分の極限を知らないでいる。極限的な人間のくせに極限でないような顔している。それでは救いはきませんよ。私も生まれつきの盲人であります。

「へえー、そんな盲人がいましたか？」

じゃない。私たち自身がこの生まれつきの盲者である。極限状況者である。もし、極限状況者でないならば、大いに努力精進して救われるでしょう。

「努力する者は救われる」

なんてゲーテが言ったけれども。ゲーテのあの言葉は、もし文字通りにそういうようにとるならば真理ではありませんよ。ゲーテは、しかし、そういう意味で言っているのではない。一生懸命で追求する。しかし、

「それから、上から力がかかってきて、その力を受けければ」

ということをはのめかし、またそのことを言っている。もちろん、ゲーテは完全に福音的な角度からとは違いますけれども。しかし、ゲーテというやつも決して自分を何ものかと思うような人間ではなかった。

●無者は同時に無限無量者とされる

「我は信ず、主よ」

と言って平伏しました。拝跪しました。平伏した。自分を完全にキリストに降参して渡した。そこに信の本当の姿がある。

私たちにとっては、そのイエスは十字架上のイエスであります。あなたがこの私そのものを片づけてくださった。十字架上で私を片づけてくださった。私というこの罪びとを、罪そのものを片づけてくださった。もう無条件に「はい」と受けとるほかない。十字架上に片づけられた我を受けとったときに、その人は無者となった。その人は根源現実において無者となった。

誰でもなれるんです。無者修行とは、現にいかなる瞬間にも直ちにそれを現実とするところの修行であります。修行ならざる修行であります。

そうして、この十字架されたキリストは十字架されたまんまではない。甦って、

「さあ、この生命を受けとれ。私が神に乞うて遣わすところの霊を受けとれ」

と。受けとる体勢はキリストがつくつてくださったんだから、何ということはない。

この無者の中に聖霊が入ってくるから、無者は同時に無限者、無量者とされる。質的な無限者であります。質的な無量であります。量り知れないもの、限りなきものが、これが聖霊というもの。この御霊のひととされる。



39 イエス言い給う『われ審判^{さばき}の為にこの世^よに來れり。

「審判のために來たのではないよ」

と、別なところで言つて、今度は、

「審判のために來た」

と言つてゐる。矛盾でも何でもない。

見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』

これが審判だ。モーセをかついで、「俺たちは」と言つてゐるやつはみんな見えなくなる。律法の下にある者、自己義認者、パリサイ人、学者・教法師、みんなこれは見えなくなる。

ところが、罪びと言われ、盲人であり、跛者であり、癩病人であり、病人であり、遊女であり、取税人であり、盜賊であり、というような、悪者と思われ爪弾^{つまはじ}きされるような人たちが逆に見えるようになる。即ち、自己の極限状況を自覚する者たちは、極限状況を指摘されて、そして、はたと我というものをその神の鏡の前に、神の光の前にした者。自分を本当に罪びとし、自分を本当に救いなき者とする者は逆に見えるようになる、そのような生まれつきの私たちは盲者であります。神のことに對して目が開かれていない人があります。大いに開かれたような顔をしているクリスチャンがたくさんいるけれども、実はそれは似て非なる開かれ方である。雲がかかつてゐる。

●パウロの開眼

その一番著しい例は、誰であろうパウロであつた。パウロは一番目が開いてゐると彼は思つた。正直、道徳的宗教的チャンピオンであります。また、學問の上からいっても最高の學問を彼は受けとつていました。イエスを信ずるやつはけしからんと言つて迫害してしました。ステパノがその殉教者として第一にパウロの前で死にました。なお意氣揚々としていたパウロである。自己義認者は最大の盲者であります。一番あいてゐると思つてゐる者が一番実は目が盲してゐる。

「お前は目があいてゐると思つてゐるが、とんでもない間違いだぞ。サウロ（後のパウロ）、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と。とうとう非常手段で甦りのキリストがダマスコ途上でサウロに道に立ちはだかつて、これを防いだ。この先をサウロは行くわけにいかん。力ある靈のキリストが現れて、真昼の太陽以上の光をもつて彼を撃つたから、ぶつ倒れてしまつた。サウロのやつは馬に乗つていたかなんか知らんけれども、馬から落つこちてゐる非常に劇的な絵があるよ。

目があいてゐると思つたら、めくらにされてしまつて、耳が聞こえると思つたら、つんばにされてしまつた。ものが言えると思つたら、おしにされる。この三つをサウロは一度に受けてしまつた。見ざる聞かざる言わざるにされてしまつた。しかし、声があつて、

「お前はアナニヤという人の所へ行きなさい」



と。アナニヤの方では、

「サウロというやつが来るから、そいつに**按手**してやれ」
あんしゅ

と。ちゃんと両方に示しがきている。使徒行伝9章。そうしたら、アナニヤに按手されて、聖霊のバプテスマを受けた。

「わが眼より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と。開いていると思ったものがめくらであつたということを知った。めくらであるということが本当に骨の髄まで分かったら、今度は引っくり返して、開眼させられた。わが眼より鱗の如きもの落ちたりと。あいていると思つたら実はあいていなかったんだと、自分は盲者であつた。今度は、それを開眼された。今日の「開眼」というのはそのことです。開眼する。

「目あきめくら」という言葉があるが、私たちはいい気になっていると、目がかすんでしまふ。徹底的に平伏しです、キリストには。「研究」とは何事だ、チャンチャラおかしい。

「聖書研究だなんて、何を言っているか。端的にこの福音書を読んで、襟を正して読みなさい。そして、キリストの前に本当に平伏しなさい。この言葉に誰が堪えるか、この業に誰か堪えうるか。このキリストの現実の前に、本当に平伏し、全身を涙とするようなことでなければ、この世界は開示してこない」

と。それは魂の世界はごまかしがきかないから、はつきりしている。ごまかして入つたつて、そんなものは決していつまでたつてもダメであります。もうはつきり言います。そういうことです。

「それだつて、研究しなければ分からないではないか」

「ああ、分からないでしょう、第二義的、三義的なことは。しかし、聖書が与える

第一義的なことは、いくら研究したつて、それは盲者で霊盲でありますぞ」

と、はつきり申します。

そういうことで、私たちは、皆さんお一人お一人が本当に福音の事柄については平伏しの魂であるからこそ、本当の権威なんですよ。我々が本来、この盲者と同じであつたが、イエスの

「神の栄光の現れんためである」

ということ、

「もう自分の罪なんてものを問題にするな。問題にするのはキリストのこの義であるぞ、愛であるぞ、生命であるぞ、光であるぞ」

と。お互いにそれを求め、それを喜んで行きましょうというのが聖霊の子らであります。

もう相対的な、そんなくだらないゴタゴタした問題はみんなすつ飛んでいってしまふ。カトリックであろうと、無教会であろうと、何々教会であろうと、私は胸襟きょうきんを開いて、誰にでも会うことができます。ただ向うが塞ぐから、仕方ありませんというだけのはなし。



それは聖霊がなければ塞ぎますよ、自分の信仰とか、自分の主義なんてやっているうちは。内村先生も、そんな意味で無教会主義なんて仰ったのではないと思う。どうも、エピゴーネン（垂流、追隨者）というのは妙なこだわりを持って困る。あのこだわり、しこりから抜けなくてはね。皆さんも本当に、非常に――何といいますかね――

「楽で、何でもなくて、またもの凄い力のある充実した世界に、何かしらなければ入りませんでした」

と段々言えるのではないですか。

あそこに、

「桃栗三年、柿八年、達磨は九年、俺一生」

なんて書いてあるけれども、しかし、「俺一生」は、一生かかって福音を受けとるのですけれども、

「一日はまた一生なり」

というから、「俺一日」だっていいですよ。私は決して表現にこだわりませんからね――
実篤（武者小路）なんていうと、みんな勿体ぶってしまつて、それは結構な言葉だけれども

――「俺一生」は「俺一日」「俺一刻」だっていい。「俺一瞬」だっていい。

「達磨のやつは九年もかかって気の毒なはなしだ。こちらは一瞬でその世界に入り

ました」

と。福音の世界はそれが言えるんですよ。一瞬に得たことを一生かかって仕上げていくわけです。なにさま、聖霊の世界は始末がつかんです。概念の規定がつかん。

ヨハネ伝9章が私たちに投じているところのこのドラマ。ミルトンが『サムソン・アゴニステス』で――非常に深刻な詩ですよ、サムソンはめくらにされた。ミルトン自身が失明してしまったから――そこで歌っている詩の、60行から90行くらいのところに深刻な告白がある。この暗黒そのもの、

「太陽も自分にとっては暗黒である。真昼間もまた自分にとっては闇である。」

と。そういった暗黒の世界にありながら、しかし、ミルトンはやはり信仰の世界で本当の光をいただいていたから、決してこれに屈せず勝利の詩を作っているわけです。

●キリストの眼をもつて見る

私たちの目、うちなる目――これはキリストがマタイ伝6章で言つてらっしゃる言葉がある。6章22節に、

「^{ともしび}22身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。」（マ

タイ6・22）

「汝の目ただしくば、全身あかるからん」とは、

「汝の目が単一ならば、全身は光に満たされる」



ということ。目は心の窓であると同時にまた目は身の灯火^{ともしび}である。この場合の「目」というのは、もちろん肉眼を通しての目でありますけれども、本当の心眼だね。心の眼が単一であつて、単純率直に分裂のない眼です。

『第三の眼』なんていう不思議な本があるけれども、我々の眉間の所に第三の眼が、霊的な眼がある。祈りの世界でそれが感ぜられる。「眉間の所」というのは、その感じを表せばということですよ。なにも生理学的に言っているのではない。二つ眼があるが、そういう第三の眼、心眼というものが単一で、キリストの光を、神の光を本当に受けたそうといった眼は霊眼でありますから――神眼というか、霊眼というか、「シン」は心でもあり神さまでもある――この神眼、霊眼というものは、聖霊をいただくと、私たちにこの第三の神眼（心眼）というものができるわけです。この第三の神眼（心眼）が率直単一にこのキリストを受けとっているならば、全存在は光となる。

「汝らは世の光なり」

とはそのわけですね。そういう意味において、このキリストにおける開眼ということとは、聖書の使徒たちのこの現実がいかに聖霊によつて開眼された世界であつたか。キリストの眼をもつてものを見ていく。キリストの光をいただいているから、その光で人を照らす。もう、そういう一如の現実。完全に受けとつて信の世界ですから、

「我は月、月は我かと分かぬまでのどかに澄める秋の夜の月」

私が月だろうか、月が私だろうか。この月を見ていると、月と自分が一つになってしまつて、

「私が月だろうか月が私だろうか、ということが分からなくなるまでに、この秋空の月が本当に私には一つになって、ただ月を眺めているのではなくなつてしまつた」

というわけです。キリストを受けとる、信ずるとはそのような、キリストと我とが一つになつて、自分がキリストを宿すものにされる。「油注がれたる者」が「クリストス」という字です。油注がれたる者そのもので私たちはあるわけです。

「映すとは水も思はず映るとは月も思わぬ広沢の池」

という。もう、「映す」という意識もなければ、「映る」ということもない。映すとは水も思わない。けれども、自然に映つてしまつている。「映る」とは月も思っていない。けれども、映つてしまつてゐる。そのような玄妙なる一如の世界になる。本当に聖霊の人となる。そして、その映されたところのキリストという方は、ただ映つてゐるのではない。光もろともに映っている世界だから、聖霊が来ているから、静かでありながらも凄い力を宿している。「静中の動、動中の静」というゆえんであります。

そうなつて、そのようなところから、どうぞ、皆さんの福音の展開が確實になつていくことを喜び感謝しながら前進してください。

